

# 平成27年度 鳴門渦潮高等学校学校評価

## 1 本校の教育目標

教育基本法の趣旨に則り、個人の尊厳と人権を尊重するとともに、校訓「自主・至誠・躍進」の精神のもと、社会の変化に主体的・創造的に対応できる能力を身につけた、心豊かなたくましい人材を育成する。

## 2 学校経営方針

- 一人ひとりの個性や可能性を最大限伸ばす教育の推進、進路指導の充実を図る。
- すべての教育活動を通じて人権尊重の精神を養い、相手の立場に立って行動できる優しさや、豊かな人間性の育成を図る。
- キャリア教育の充実を図り、勤労意欲を高めるとともに、規範意識を身につけた生徒の育成を図る。
- スポーツ科学科と総合学科の特性を活かした、ボランティア活動、文化活動、スポーツ活動、国際交流を推進し、地域に貢献できる生徒の育成を図る。
- 地域に信頼される学校として、教職員の資質向上と開かれた学校づくりに努める。

## 3 本年度の重点目標

- 生徒指導の充実
  - ①他人を思いやる優しさや豊かな人間性の育成に努める。
  - ②社会のルールや校則を厳守させ、規範意識の向上を図る。
  - ③生徒理解を深め、個に応じた生徒指導に努める。
- 環境教育・安全教育の推進
  - ①生命を尊重し、心身の健康と、環境問題への意識の高揚をはかり、自他の安全を守る能力を育成する。
  - ②校内の美化に努め、情操豊かな学校環境づくりに努める。
  - ③防災・減災教育を推進し、地域防災の即戦力及び将来の担い手を育成する。
- 特別活動の推進
  - ①ホームルーム活動・生徒会活動や学校行事を活性化させ、自主性や実践的な態度を育成する。
  - ②部活動を推進し、スポーツ活動において質の高い専門教育を行い、競技力の向上を図るとともに、スポーツ振興に寄与する人材を育成する。
  - ③ボランティア活動を積極的に行い、豊かな人間性を育てる。
- 学習指導の充実
  - ①基礎的・基本的な事項の指導を徹底し、基礎学力の向上定着を図る。
  - ②幅広い選択科目を設定し、生徒一人ひとりの興味・関心・進路に応じた履修指導を推進する。
  - ③生徒の学習意欲を引き出す指導体制・指導方法の工夫・改善を図る。
- 進路指導の徹底
  - ①生徒一人ひとりの学力や適性などを的確に把握し、個に応じたきめ細かな指導を徹底する。
  - ②スポーツ科学科・総合学科の特性を考慮したキャリア教育を推進する。
  - ③進路設計や進路選択に必要な情報提供を組織的・計画的に行い、生徒一人ひとりの勤労観・職業観の育成を図る。
- 人権教育の推進
  - ①学校の教育活動を通して人権尊重の教育・道徳教育を展開する。
  - ②地域や家庭と連携した人権教育を推進する。
  - ③自主活動の活発化に努める。
- 読書活動の推進
  - ①生徒の自主的な読書活動を推進する。
  - ②新聞を活用した学習活動を推進する。
  - ③学校図書館の活用を推進する。
- 開かれた学校づくりの推進
  - ①オープンスクール、公開授業など教育活動の公開を推進する。
  - ②ホームページ等を利用して迅速な情報発信を推進する。
  - ③地域・PTA・同窓会等との情報の共有や連携を円滑にするシステムを構築するとともに、地域の人材の活用を推進する。
- グローバル教育の推進
  - ①郷土の伝統・文化について理解を深める教育を推進する。
  - ②異文化理解学習を通じて共生の精神の涵養を図る。
  - ③スポーツ等を通じた国際交流を推進する。
- 学校運営体制の充実
  - ①教職員のコンプライアンス意識の高揚を図る。
  - ②危機管理態勢の徹底を図る。
  - ③学校価値の創造を推進する新規事業の創出、地域の人材づくり、国際交流等、新しい企画を推進するとともに、

重点課題	重点目標	評価指標と活動計画 目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
1 生徒指導の充実	①他人を思いやる優し しさや豊かな人間性の 育成に努める。	①心の健康調査を実施し、活用する。 (保健環境)	調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が80%以上であった。 調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が70%以上であった。 調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が50%以上であった。 調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が50%未満であった。	Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓ	①今年度は生活習慣に関するアンケートを実施し、心身の状態を把握するために有効であった。	A	評価指標については、概ね達成できた。生徒との面談は生徒理解にとって有効であると、多くの教員が感じている。面談は生徒が気持ち安定させ、落ち着いた学校生活を送っていくうえで効果的であった。	・面談が担任だけに負担とならぬよう副担任や学年団の協力体制が必要である。 ・生徒との面談や生徒理解に役立つ職員研修会を検討する。
		②生徒との面談を実施し、生徒理解を深める。 (保健環境)	面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担当が80%以上であった。 面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担当が70%以上であった。 面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担当が50%以上であった。 面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担当が50%未満であった。	Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓ	②面接週間(7回/年)等を活用し面接が実施できた。面談が生徒理解・生徒指導に有効であったという回答は92%であった。			
		③教育相談・特別支援教育の研修を実施する。 (保健環境)	研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が80%以上であった。 研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が70%以上であった。 研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が50%以上であった。 研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が50%未満であった。	Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓ	③演習を取り入れた研修を実施することで、実施後のアンケートでも職員の満足度は高かった。			
	②社会のルールや校則を厳守させ、規範意識の向上を図る。	①定期的に服装・頭髮検査を実施する。 (生徒指導)	違反者数が0になった。 全体で違反者数が10人未満になった。 違反者数が前年度とほぼ同数であった。 違反者数が前年度より増加した。	A Ⓑ Ⓒ Ⓓ	①学校においては、保護者との連携を密にして生活指導(頭髪、服装等)にあたっていると生徒、保護者の90%が回答しているが、現状を鑑みて、指導・支援を拡充していく必要性を感じている。	B	キャンパス統合により生徒数が増加した関係で、遅刻総数も増加している。生活習慣の乱れがトラブルにあう要因となっており、自らトラブルを回避していくような指導が必要であると感じている。しかし、委員会活動などが活発になり、生徒間でマナーを良くしようとするような雰囲気もあり、学校自体が活気について自浄作用がでてきている。	・平成27年度の遅刻数は、昨年度より増加した。特に10月以降急激に増加している点については改善が必要であると考えている。さらに多遅刻者の生活態度の改善に向けて、多角的な指導と総合的な支援を実施していきたい。 ・保護者と連携した通学指導を実施し、交通マナーの向上を図ることができた。引き続き通学指導、巡視などをおしてさらに向上をはかりたい。
		②毎日、通学指導(挨拶・身だしなみ・通学マナー)を行い遅刻者数の減少を目指す。 (生徒指導)	遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数より10%以上減少した。 遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数を下回った。 遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数を上回った。 遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数より10%以上増加した。	A Ⓑ Ⓒ Ⓓ	②生徒数が増加したこともあり、1日における遅刻者数の割合が昨年より増加した。			
		③学校の生徒指導の方針を明確に示し、教職員の共通理解を図る。 (生徒指導)	教職員の指導目標に対する達成度が90%以上であった。 教職員の指導目標に対する達成度が80%以上であった。 教職員の指導目標に対する達成度が50%以上であった。 教職員の指導目標に対する達成度が30%以上であった。	Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓ	③教職員の生徒指導の共通理解がはかれたという項目が86%であった。			
		④登校時の交通マナーの向上と、自転車マナーの順守を図る。 (生徒指導)	定期的に生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、大きく効果を上げた。 定期的に生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、効果を上げた。 不定期ではあるが生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、効果を上げた。 不定期の実施となり、効果が上がらなかった。	Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓ	④毎月1回のマナーアップ活動で生活委員会が駐輪場を整理・整頓してくれているため、生徒自ら駐輪マナーを向上させる効果があった。			
		⑤教職員・PTA・生活安全委員で協力し、交通安全の啓発のための安全指導・交通マナーアップキャンペーンを行う。(生徒指導)	教職員・PTA・生活安全委員で協力し、計画通りに実施することができた。 定期的に実施することができた。 不定期ではあるが、実施することができた。 実施することができなかった。	A Ⓑ Ⓒ Ⓓ	⑤毎学期に1回のマナーアップ活動にPTA役員、生活委員で校門指導を実施した。			
		⑥長期休業中に校外巡視を実施する。 (生徒指導)	年3回以上実施し、問題行動等未然防止に成果をあげた。 年2回実施した。 年1回実施した。 全く実施できなかった。	Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓ	⑥校外巡視を実施し、校外における生徒の実態把握につとめた。			
		⑦補導センター・警察に学期ごとに訪問し、情報交換に努める。 (生徒指導)	十分意見交換ができ、生徒指導に活かすことができた。 毎月訪問をし、十分な意見交換ができた。 毎月訪問したが、十分な意見交換ができなかった。 毎月訪問できなかった。	Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓ	⑦毎月1回の割合で警察等の関係機関に訪問し、情報を共有していた。			
③生徒理解を深め、個に応じた生徒指導に努める。	①問題行動等を起こした生徒や、良好な学校生活のできていない生徒の保護者に対する面談を実施する。 (生徒指導)	保護者と共通理解を図り、生徒に対する支援に成果を上げた。 保護者との共通理解は図れたが、生徒に対する支援の成果は不十分であった。 保護者との共通理解は図れたが、生徒に対する支援の成果を上げられなかった。 保護者との共通理解を図ることができなかった。	Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓ	①問題行動を起こした生徒に対し、保護者や関係機関と連携して対応できた。大きなトラブルにつながるような事案を未然に防げるようなこともあった。	B	家庭連絡をまめにおこなうなどし、生徒の実態を把握しながら教員間でも共有できており、大きなトラブルを未然に防ぐことができています。	・生徒の日頃の生活習慣や顔つきからトラブルにつながっている傾向があり、小さな変化にも気づけるように教員間でさらに情報を共有できるような体制を構築していかなければいけない。	
	②いじめ防止等のためにアンケートを実施する。 (生徒指導)	年2回以上実施し、いじめ等を未然防止に成果をあげた。 年2回実施した。 年1回実施した。 全く実施できなかった。	Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓ	②毎学期に1回実施し、生徒の実態を把握し、大きなトラブルにつながるような事案を未然に防げるように努めている。				

重点課題	重点目標	評価指標と活動計画 目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
2 環境教育・安全教育の推進	①生命を尊重し、心身の健康と環境問題への意識の高揚をはかり、自他の安全を守る能力を育成する。	①心肺蘇生・AED訓練を実施し、応急手当の知識や技術の習得を図る。 (保健環境)	心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が80%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が70%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が50%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が50%未満であった。	A B C D	緊急時、災害時に迅速に正しい行動がとれるかどうかは非常に大切であり、新校舎・新環境の中で迅速かつスムーズな対応がとれるよう日頃から心がけた。 ①心肺蘇生・AED訓練②参加し知識と技術を取得できたと答えた教員は98.2%であった。 ②健康診断受診率は99.9%であった。 ③校内の掲示板がとても見やすいと答えた教員は13.7%、見やすいと答えた教員は43.1%であった。 ④AEDの設置場所について3カ所とも知っているか答えた生徒は20.2%で使用方法をよく知っているか知っているか答えた生徒はそれぞれ9%、28.5%であった。	B	2キャンパスから統合に移行し、様々な環境整備が平行して行われる中でも、概ねスムーズに新体制が確立されたように感じた。中でも防災拠点としての位置づけや、避難経路、地域住民との協調体制などまだまだ課題は山積しているため、引き続き高い意識を維持するためにも、校内ファンリティーの熟知などできることから行わなければならない。	・今年度の移行期における反省をふまえ、新年度からも心身が健康な状況の中で生徒も教職員も危機意識のさらなる向上がみられるよう、日々の生活習慣や健康維持活動に努められるように促していきたい。
		②健康について関心を持たせ、疾病異常の早期発見のため、健康診断の受診や事後措置の徹底を図る。 (保健環境)	健康診断受診率が100%であった。 健康診断受診率が95%以上であった。 健康診断受診率が90%以上であった。 健康診断受診率が90%未満であった。	A B C D				
		③掲示板の充実を図る。 (保健環境)	定期的に更新され、見やすい掲示板になっている。 定期的に更新されているが、やや見づらく感じる。 期限切れの案内が掲示されているのを時折見かける。 ほとんど更新されておらず、乱雑な掲示がされている。	A B C D				
		④保健だよりやホームルームでの啓発等あらゆる機会を捉えてAEDの設置場所について周知を図る。 (保健環境)	AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が80%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が70%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が50%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が50%未満であった。	A B C D				
	②校内美化に努め、情操豊かな学校環境づくりに努める。	①毎日の清掃や大掃除を積極的に行わせ、学習環境を自ら整えさせる。 (保健環境)	意欲的に清掃に取り組んだ生徒が80%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が70%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が60%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が60%未満であった。	A B C D	新校舎の暫定使用ならびに新環境の中で3学年が揃ったことで、多人数により広大な敷地を清掃することの困難さを痛感した。通常の清掃環境ならびにボランティア生徒による早朝や長期休業中の清掃活動を行うなど出来る範囲での「美しく使う」指導の大切さを改めて実感した。 ①積極的に清掃に取り組んだと答えた生徒が29.1%取り組んだと答えた生徒が50.9%であった。 ②ゴミの分別が出来ていると答えた生徒が81%であった。 ③ゴミのポイ捨てがほとんどないと答えた生徒が28.9%で余計なゴミが目立つと答えた生徒が48.2%であった。	B	・学校版新環境ISOの取り組みが認められるなど、保健環境課をとりまく環境も大きく変貌した。そこで次年度以降も地域の期待や生徒の実情にあわせた事業整備が必要になることが予想される。いくつかの行事や取り組みに集中して礎を築いていきたいと考える。	
		②ホームルームにおいてゴミの分別に対する意識の高揚を図る。 (保健環境)	ゴミの分別ができている生徒が90%以上であった。 ゴミの分別ができている生徒が80%以上であった。 ゴミの分別ができている生徒が70%以上であった。 ゴミの分別ができている生徒が70%未満であった。	A B C D				
		③ゴミ処理の意識の高揚を図る。 (保健環境)	ゴミのポイ捨てが校内のほとんどの場所でなくなり、余計なゴミの持込も少ない。 ゴミはほとんどゴミ箱に捨てられてはいるが、余計なゴミの持込が少々目立つ。 ゴミのポイ捨ても少々目立つし、余計なゴミの持込もやや多い。 ゴミのポイ捨てもたいへん目立ち、余計なゴミの持込もたいへん多い。	A B C D				
	③防災・減災教育を推進し、地域防災の即戦力および将来の担い手を育成する。	①防災訓練を実施し、防災拠点としての役割を正しく認識している。 (保健環境)	全教職員の80%以上が防災体制が確立していると感じている。 全教職員の70%以上が防災体制が確立していると感じている。 全教職員の60%以上が防災体制が確立していると感じている。 防災体制が確立していると感じている教職員が60%未満であった。	A B C D	本年度はキャンパス統合の一年となり、昨年度までの環境整備状況を改め手探りながら新環境へのスムーズな移行に努めた。その中でも起震車体験や消火器訓練など避難訓練・施設熟知をはかり、そのことが教職員にも生徒にもある程度伝わったと実感できる。 ①防災体制が確立しているか答えた教職員が89.1%であった。 ②避難訓練などを通して防災意識が高まったと答えた生徒が24.7%、すこし高まったと答えた生徒が49.3%であった。	B	・新校舎が地域防災の拠点となり、保健環境課をとりまく環境も大きく変貌した。そこで次年度以降も地域の期待や生徒の実情にあわせた事業整備が必要となるので、精査のうえ効率よく取り組みたい。	
		②防災教育や防災計画を通して、防災準備(避難グッズや経路の確認)率を高める。 (保健環境)	防災準備が整った生徒が80%以上であった。 防災準備が整った生徒が70%以上であった。 防災準備が整った生徒が60%以上であった。 防災準備が整った生徒が60%未満であった。	A B C D				

重点課題	重点目標	評価指標と活動計画 目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
3 特別活動の推進	①ホームルーム活動・生徒会活動や学校行事を活性化させ、自主性や実践的な態度を育成する。	①生徒会を中心としたあいさつ運動や清掃奉仕活動等が毎月計画的に企画・運営され、多くの生徒が活動に参加するように支援する。(特別活動)	生徒会や専門委員会が中心となり企画運営ができ、毎月実施した。生徒会や専門委員会の一部の生徒で実施した。実施はしたが、不定期であった。実施しなかった。	Ⓐ Ⓑ <sub>○</sub> Ⓒ Ⓓ	①あいさつ運動や清掃活動は毎月計画的に企画・運営することができ、積極的に参加することができた。	A	キャンパスが一つになり、年度途中で生徒会も大津・撫養両キャンパスにあったものが一つになった。積極的な生徒会役員が多く、今までの学校行事の枠にとらわれず新しい物を取り入れようとする姿勢が見られ活発に学校行事等が企画・運営された。	・各学校行事に生徒会役員が主体となり企画・運営することができるようになった。今後は各種専門委員会の活性化を図り、ますます生徒主体の学校行事の企画・運営ができるようにする。
		②生徒会を中心とした生徒主体の球技大会・学校祭が企画・運営されるように支援する。(特別活動)	生徒会が中心となり、自発的に企画運営でき、各行事が円滑に行われた。生徒会が中心となり、各行事を実施できた。生徒会が中心となり企画したがあまり協力を得られず運営が円滑ではなかった。生徒会や専門委員会が機能しなかった。	Ⓐ Ⓑ <sub>○</sub> Ⓒ Ⓓ	②球技大会や学校祭は、生徒会が主体となり企画・運営することができた。特に学校祭や予餞会では創意工夫が見られ画期的に実施することができた。			
		③学校行事において、個人の個性が活かせ、積極的にできるように支援する。(特別活動)	一人一人の個性が十分に発揮された。一人一人の個性がおおむね発揮された。一部の生徒のみの活動であった。生徒の個性が発揮されず、活気が感じられなかった。	Ⓐ Ⓑ <sub>○</sub> Ⓒ Ⓓ	③学校行事では積極的に参加する生徒とそうでない生徒の二極化が見られた。			
		④専門委員会活動の活性化を図るため、各専門委員会の役割を明確にし責任を果たせるように支援する。(特別活動)	役割を自覚し、その責任を果たせた。80%以上 役割は自覚し、その責任はおおむね果たせた。70%以上 役割は自覚していたが、あまりその責任を果たすことができなかった。 役割の自覚が十分でなく、その責任を果たせなかった。	A B Ⓒ <sub>○</sub> D	④専門委員会は活発に活動できた委員会とあまり活動できなかった委員会とに分かれてしまった。			
	②部活動を推進し、スポーツ活動において質の高い専門教育を行い、競技力の向上を図るとともに、スポーツ振興に寄与する人材を育成する。	①部活動の意義について理解し、計画的に実施し生徒の自主的・自発的活動を支援する。(特別活動)	部活動の年間計画に沿って活動ができ、その目標を達成することができた。年間計画に沿った活動がほぼできたが、目標の達成には及ばなかった。年間計画通りの活動があまりできず、目標の見直しの必要性を感じた。年間計画に沿った活動ができず、各部の方針や目標を達成することができなかった。	Ⓐ Ⓑ <sub>○</sub> Ⓒ Ⓓ	①各部活動の活動は計画的に実施できた部とそうでない部との二極化が出ている。各部活動とも目標達成にむけ努力している。	B	活発な活動が見られ日々目標達成に向けての努力が見られた。学校敷地内の工事が多いが各部の創意工夫で活動に影響なく行われている。	・各部活動に専門性の高い指導者の配置を実施するとともに、生徒の自主性・自発性を支援できるように指導する。
		②部活動を推進するため、関係機関との連携や、指導方法について工夫し、専門性を高め競技力の向上を図る。(特別活動)	昨年度実績より競技力が向上した。 昨年度実績とほぼ同等の競技力であった。 昨年度実績よりやや競技力が低下した。 昨年度実績より大幅に競技力が低下した。	A Ⓑ <sub>○</sub> Ⓒ D	②指導方法の専門性を高める努力と指導方法の工夫も見られた。ただ、すべての部活動に専門の教員の配置が困難なため競技力の向上に支障のある部活動も一部にあった。			
	③ボランティア活動を積極的に行い、豊かな人間性を育てる。	①自分自身の生活する学校や地域社会において起こる課題の解決に対して、自分自身が自発的・主体的にその問題を解決していこうとする。(企画総務)	ボランティア活動の意義を理解し主体的・積極的に参加でき、継続できている。周りがやっていたので活動には参加した。ボランティア活動に参加しただけであった。やる気も見せることなく、何もなかった。休んだ。	Ⓐ Ⓑ <sub>○</sub> Ⓒ Ⓓ	①学校の内外でのボランティア活動について広報するとともに、生徒の活動を盛り上げた。授業では講演会を通して地域社会への親しみや世界の文化の理解を進めた。	B	積極的に地域に対しボランティアをしようとする生徒がいると同時に生徒に対するアンケートでは周りがやっているの自分も行動したという受け身の生徒が50.3%と最も多かった。	・自分自身の所属する学校や地域社会に対して愛着を持ち、問題解決をしていこうという態度を生徒に持たせるために、学校行事(生徒総会、清掃活動)などを充実させていく。

重点課題	重点目標	評価指標と活動計画 目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
4 学習指導の充実	①基礎的・基本的の指導を徹底し、基礎学力の向上定着を図る。	①生徒が理解しやすいように配慮した授業をする。 (教務)	生徒の80%以上が授業が分かると感じている。 生徒の70%以上が授業が分かると感じている。 生徒の60%以上が授業が分かると感じている。 生徒の60%未満が授業が分かると感じている。	A B C D	①「毎日の授業はわかりやすいですか」というアンケートの結果は、ほとんどの科目は理解できている(15.7%)、半分くらいの科目は理解できている(67.1%)合計が84.3%であった。	B	生徒の理解度に合わせた授業の実施ができている。選択授業が多い総合学科で教室移動も多く、生徒・教員ともに授業への意識は高い。 例年受験している資格については受験者数の変化もあり評価は難しいが、横ばいと考えられる。 それぞれの教科担任が創意工夫を凝らした授業を展開し、基礎基本を徹底に努めた。また、担任との面談や「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」を通して、きめ細やかな履修指導ができ、進路に対する意識の向上につながった。 学習環境については新しい校舎を美しく使いゴミのポイ捨てをしないなどの指導ができていた。	・授業、課題、資格検定において、内容の精選・指導力の向上を含めた検討を行い、引き続き生徒の基礎学力の向上定着を図る努力を行う。 ・来年度は評価基準を合格率で判断したい。 ・次年度は授業参観や学校の公開授業の時に多くの保護者の声を聞く体制を作りたい。
		②週末課題を含め、家庭での学習時間を確保させる。 (進路指導)	週末課題の提出率が90%以上であった。 週末課題の提出率が70%以上90%未満であった。 週末課題の提出率が50%以上70%未満であった。 週末課題の提出率が50%以下であった。	A B C D	②教科により提出率の差があり、正担任の集計では90%以上と70%以上90%未満が約40%と拮抗している。家庭学習時間は2年次が300分未満が46%と増加する。			
		③始業チャイムを生徒とともに聞く。 (教務)	毎授業チャイムを教室で聞いた教員が90%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が80%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が70%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が70%未満であった。	A B C D	③「始業のチャイムを生徒とともに教室で聞いていますか」というアンケートの結果は、毎回聞いている(31.4%)、ほとんど聞いている(54.9%)合計が86.2%であった。			
		④定期的に学力向上プランの検証・改善を行い、重点目標の達成を推進する。 (学力向上)	学力向上重点項目の各評価の年度末検証の評価平均値が4点中3.5以上であった。 学力向上重点項目の各評価の年度末検証の評価平均値が4点中3以上であった。 学力向上重点項目の各評価の年度末検証の評価平均値が4点中2.5以上であった。 学力向上重点項目の各評価の年度末検証の評価平均値が4点中2.5以下であった。	A B C D	④学力向上重点項目の各評価の年度末検証の評価平均値が4点中3.2であった。			
		⑤各教科において、資格や検定受験を積極的に薦め、指導・支援する。 (進路指導)	昨年度に比べ合格者が10%以上増加した。 昨年度に比べ合格者が0%より大きく10%未満増加した。 昨年度と合格者が同数であった。 昨年度より合格者数は下がった。	A B C D	⑤新しい資格へチャレンジする受験者が増え、合格者数での評価が難しい。			
		⑥家庭と連携し、校内の学習環境を整える。 (企画総務)	学習環境向上の取り組みにより現状の改善が見られた。 PTA役員と共に実践に学習環境の向上に取り組んだ。 PTA役員による学習環境向上への対策が立てられた。 PTA役員が教室の現状を確認できた。	A B C D	①保護者に学校内の学習環境に対するアンケートを行った。学校の学習環境が整えられているかのアンケートによく整えられている14.7%おおむね整えられている69.0%であった。			
②幅広い選択科目を設定し、生徒一人一人の興味・関心・進路に応じた履修指導を推進する。	①個別の相談体制を充実させ、個々の生徒に応じた時間割の作成に努める。 (教務)	生徒の90%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の80%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の70%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の70%未満が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。	A B C D	①「時間割作成時に先生方はよく相談に乗ってくれたと思いますか」というアンケートの結果は、大変よく相談に乗ってくれた(22.4%)、よく相談に乗ってくれた(66.4%)合計が88.8%であった。	B	時間割作成においてほぼA評価にあたる高い水準の評価を得られた。また現在の時間割についても満足度が80%となっている。よい一層生徒の個性・進路にあった履修モデルの作成に取り組む。	・履修モデルの検討を行い、生徒の個性・進路に応じた科目選択を実現させる。また、進路希望に応じたクラス編成を行い、同じ目標に向けて取り組む仲間同士でよい刺激をしい、学習の充実を図る。	
	②生徒の個性・進路に合った科目選択をさせる。 (教務)	生徒の時間割満足度が90%以上であった。 生徒の時間割満足度が80%以上であった。 生徒の時間割満足度が70%以上であった。 生徒の時間割満足度が70%未満であった。	A B C D	②「現在履修している時間割に満足していますか」というアンケートの結果は、大変満足している(12.1%)、満足している(68.0%)合計が、80.1%であった。				
③生徒の学習意欲を引き出す指導体制・指導方法の工夫改善を図る。	①学習週間を設け、学習の習慣化を図り、面接を効果的に利用する。 (教務)	生徒の90%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の80%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の70%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の70%未満が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。	A B C D	①定期考査の1週間前から年次に応じて学習室を設け、生徒の学習の支援を行っている。また、定期考査終了後は担任との面接を行い、振り返りやアドバイスをし、進路実現に向け取り組んでいる。学習週間に対するアンケートの結果は、取り組めた以上が67.8%。面接週間に対するアンケートの結果は、できた以上が78.0%であった。	B	生徒の学習においては、定期考査での反省はするが十分に学習に取り組めなかったという意見が多い。学習の習慣化に向けての取り組みが必要である。 教員の指導面では、育成評価システムにおける学習指導の評価B以上の教員が全体の93.5%であった。生徒の課題やノート等の提出状況も概ね良好であった。 また、2名の教員が指導方法の向上に向けた取り組みが行えなかったのが残念である。	・1年次の学習室の利用は多く、学習の習慣化が図れてきている。今後は、意見が多い。学習の習慣化に向けての波及を進めるために教室の開放を検討する。	
	②全員が学力向上に向けて個人目標を設定し、取り組みを推進する。 (教務)	育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の90%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の80%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の70%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の70%以上であった。	A B C D	②育成評価システムにおける学習指導の評価(A, B, C, D)の評価B以上の教員が全体の93.5%であった。				
	③教員相互間の授業見学および研究授業を実施し、指導方法向上を目指す。 (教務)	教員の全員が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の90%以上が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の80%以上が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の80%未満しか指導方法向上に向けた取り組みを行えなかった。	A B C D	③「12月末までに相互授業参観、または研究授業に参加し指導法の向上に努めましたか」のアンケートの結果は、96.2%の教員が取り組みを行ったと回答した。				

重点課題	重点目標	評価指標と活動計画 目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
5 進路指導の徹底	①生徒一人ひとりの 学力や適性などを的確に把握し、個に応じたきめ細やかな指導を徹底する。	①面談を通じて生徒の学力・適性・個性を把握する。 (進路指導)	面談を活用し、十分な生徒理解と、進路に対するアドバイスができた。 面談を活用し、おおむね生徒理解ができた。 面談を実施したが、満足のいく生徒理解ができなかった。 面談を実施できなかった。	A B C D	①面談を通して生徒理解に大変有効・有効であったを合わせて92%の回答があり、目標が達成できた。	B	生徒理解を行うには個別面談はとても大切で、会話を行うことにより生徒の把握につながるため、今後も必要性を感じている。特に3年次においては進路先と直結するので、丁寧に進める必要がある。 また、支援体制で17%の生徒が支援してくれていないと感じているので改善の必要性も感じている。	・生徒自身の将来設計に向けてのアドバイスを的確に行い、支援体制を充実させる。 ・3年次においては、担任間の連絡調整を密にした。
		②進路対策会議を実施する。 (進路指導)	必要な情報を共有し、進路指導に十分活用することができた。 必要な情報を共有することはできず、十分活用することができなかった。 必要と感じる情報を共有することができなかった。 進路対策会議を実施しなかった。	A B C D	②役に立ったが84.9%の回答で目標が達成できた。また、3年次においては適宜会議を行うことにより、スムーズに情報を共有できた。			
		③生徒一人一人の進路実現に向けての支援体制を拡充する。 (進路指導)	支援体制についての生徒の80%以上が満足した。 支援体制についての生徒の70%以上が満足した。 支援体制についての生徒の50%以上が満足した。 支援体制についての生徒の50%未満しか満足しなかった。	A B C D	③進路実現のための支援体制については支援体制があると少しはあると思うを合わせると、83.2%の回答があり、目標が達成できた。 個別面談・講話会等を行った。			
	②スポーツ科学科・総合学科の特性を考慮したキャリア教育を推進する。	①インターンシップを行い、事前事後の指導を充実させる。 (企画総務)	参加生徒の80%以上が満足した。 参加生徒の70%以上が満足した。 参加生徒の50%以上が満足した。 参加生徒の50%未満しか満足しなかった。	A B C D	①インターンシップの2年次での満足度を学校評価アンケートで調査した。大変良かった34.4%良かったが49.2%であった。また今年度はインターンシップの発表会を実施し、指導の充実に努めた。	A	今年度、インターンシップの発表会をはじめとしてどの学年でも生徒の発表の機会をもうけ、指導の充実が図られた。産社・総学の内容では生徒発表のレベルも高くなった。	・今年度様々な総学・産社の試みを行った。今後も地域と連携しながら発展させていくために、生徒の校外活動を支援する仕組みを作ることが必要である。また、外部講師の方に喜んできてもらえるような学校づくりを充実させていくことが大事である。
		②総合学科における「産社」・「総学」の内容を充実させる。 (企画総務)	生徒の80%以上が「産社」・「総学」の授業に満足した。 生徒の70%以上が「産社」・「総学」の授業に満足した。 生徒の50%以上が「産社」・「総学」の授業に満足した。 生徒の50%未満しか「産社」・「総学」の授業に満足しなかった。	A B C D	②産社総学の内容について生徒の学校評価アンケートでは大変良かったが14.8%、良かったが34.1%であった。今年度は産業社会と人間・総学ともに外部講師の数が増え、充実した内容となった。			
		③総合学科における「産社」全体発表会、総学の「課題研究発表会」を充実させる。 (企画総務)	生徒の80%以上が発表会に満足した。 生徒の70%以上が発表会に満足した。 生徒の50%以上が発表会に満足した。 生徒の50%未満しか発表会に満足しなかった。	A B C D	③産社の全体発表会・総学の課題研究発表会をそれぞれ学年で実施した。3年次は個人で発表し、1年次はグループ発表であったがそれぞれの発表に対する聞く態度も良く、産社では外部からも審査員に来ていただき充実した発表会となった。			
		④スポーツ科学科の進路に対して大学・企業の開拓を行う。 (進路指導)	進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の80%以上が満足した。 進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の70%以上が満足した。 進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の50%以上が満足した。 進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の50%未満しか満足しなかった。	A B C D	④88%の満足の回答があり、目標が達成できた。			
	③進路設計や進路選択に必要な情報提供を組織的・計画的に行い、生徒一人ひとりの 勤労観・職業観の育成を図る。	①進路講演会・講話、ホームルーム活動を通じて生徒の進路観育成に努める。 (進路指導)	進路情報の提供について、生徒の80%以上が満足した。 進路情報の提供について、生徒の70%以上が満足した。 進路情報の提供について、生徒の50%以上が満足した。 進路情報の提供について、生徒の50%未満しか満足しなかった。	A B C D	①役だった・少し役立ったが79.7%の回答があり、ほぼ目標が達成できた。講話・ホームルームを通して行うことができた。	B	自分の将来設計をしっかりと考え講演会に臨むことにより、満足度が向上すると考える。 しおりを利用しての、14項目学習や求人票等の見方をホームルーム活動で行うことによりしおりの活用割合を多くしたい。	・引き続き講話等を利用して自分を見つめる機会を増やしたい。 ・しおり発刊の時期を早めたい。
		②ホームルーム活動を含め、進路のしおりを活用する。 (進路指導)	進路のしおりを利用した生徒が80%以上であった。 進路のしおりを利用した生徒が70%以上であった。 進路のしおりを利用した生徒が50%以上であった。 進路のしおりを利用した生徒が50%未満であった。	A B C D	②本年度は3年次のみ発行とし、提出書類等も織り込みとし利用頻度を上げるよう努めた。その結果利用割合が71.4%であった。			

重点課題	重点目標	評価指標と活動計画 目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方針
6 人権教育の推進	①学校の教育活動を通して人権尊重の教育・道徳教育を展開する。	①各教科・科目・ホームルーム活動・「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」等全ての教育活動に人権尊重の理念を定着させる。 (人権教育)	各教科の人権教育の学習評価で、ABの合計が80%以上であった。 各教科の人権教育の学習評価で、ABの合計が70%以上であった。 各教科の人権教育の学習評価で、ABの合計が60%以上であった。 各教科の人権教育の学習評価で、ABの合計が50%以上であった。	A B C D	①外部講師を招いての「産業社会と人間」の講座では、人権学習の視点を取り入れた授業展開を実施し、生徒の反応も良好であった。	A	各教科における学習や「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」において、人権尊重を根底に据えた学習指導が展開され、生徒の評価は概ね良好な結果となっている。 夏期休業中の課題にしている人権意見作文はほとんどの生徒が提出できた。そして、それを校内人権意見発表会につなげているが、発表者の人権問題に対する真摯な気持ちが聴取者に伝わり、人権意識の向上につなげることができた。 人権に関する映画会・講演会では事後の感想文で、人権問題解消に向けた前向きな記述が多数あり、その成果がうかがわれた。	・本校の特色(スポーツ科 学科設置や防災拠点校 など)を踏まえた人権教育のあり方を考える必要があると思われる。 ・生徒が自らの課題として人権問題をとらえ、主体的に取り組もうとする指導計画の充実をめざす。
		②人権学習ホームルーム活動を柱として、人権や命の大切さを根底に捉えた人権教育や道徳教育を推進する。 (人権教育)	人権学習ホームルーム活動に満足している生徒が70%以上であった。 人権学習ホームルーム活動に満足している生徒が60%以上であった。 人権学習ホームルーム活動に満足している生徒が50%以上であった。 人権学習ホームルーム活動に満足している生徒が40%以上であった。	A B C D	②生徒が主体的に取り組むことができる人権ホームルーム活動を目指し、各担任が指導計画の工夫に努めたことにより、生徒の評価は目標値を上回る結果が得られた。			
		③人権意見作文や研修・講演会等の感想を書くことで、人権意識の向上を目指す。 (人権教育)	全校生徒の90%以上が感想文を提出した。 全校生徒の80%以上が感想文を提出した。 全校生徒の70%以上が感想文を提出した。 全校生徒の60%以上が感想文を提出した。	A B C D	③人権意見作文は殆どの生徒からの提出が得られた。また、人権に関する映画会・講演会では、事後の感想文で人権問題解消に向けた前向きな記述が多く見受けられ、一定の成果を挙げる事ができた。			
	②地域や家庭と連携した人権教育を推進する。	①教職員間の人権意識向上を目指した研修会を実施する。 (人権教育)	研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が80%以上であった。 研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が70%以上であった。 研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が60%以上であった。 研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が50%以上であった。	A B C D	①教職員研修は、本校が防災拠点校であることを踏まえ、「防災と人権」をテーマに講師を選定して実施し、災害時においていかに人権を確保するべきかについて認識を深める研修ができた。	B	・研修の充実に向けて、教職員が抱える問題意識やニーズを踏まえたテーマの設定や、外部講師の選定を実現する。 ・保護者への人権啓発のあり方に工夫を要する。	
		②鳴門市人権文化祭や県内各種人権問題の大会や研修会に積極的に参加する。 (人権教育)	鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の60%以上であった。 鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の50%以上であった。 鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の40%以上であった。 鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の40%未満であった。	A B C D	②各種の人権大会や行事にできる限り多数の教職員が参加できることをめざし、年度当初に参加計画をたて、ほぼ予定通り実施し成果をおさめた。			
	③自主活動の活性化に努める。	①人権委員会、人権意見発表会、校内自主活動、「人権を語る高校生の集い」等への生徒の積極的参加を促す。 (人権教育)	校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、60名以上であった。 校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、50名以上であった。 校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、40名以上であった。 校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、40名未満であった。	A B C D	①校内人権意見発表会は、1・2年次で、すべてのクラスから発表者を得ることができ、生徒の参加状況は良好であった。一方「中高生による人権集会」への参加が少数にとどまった。	B	・自主活動の育成の観点から人権委員会および社会問題研究部の活動をいかに活性化していくかが課題である。	

重点課題	重点目標	評価指標と活動計画 目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
7 読書活動の推進	①生徒の自主的な読書活動を推進する。	①学級文庫の利用を促進する。 (図書情報)	学級文庫を利用した生徒が70%以上であった。 学級文庫を利用した生徒が60%以上であった。 学級文庫を利用した生徒が50%以上であった。 学級文庫を利用した生徒が50%未満であった。	A B C D	①本年度は7月と10月の2回に分け学級文庫を配布した。利用率は48%と目標に届かなかった。また、朝の読書週間を行った。	C	生徒が興味を持ちそうな本を選んで配布したが、利用した生徒が50%に届かなかった。	・読書に興味のない生徒も多く、読書の必要性や意義を訴える必要がある。
	②新聞を活用した学習活動を推進する。	①SHRやHR活動において新聞を活用する。 (図書情報)	新聞を活用したHRを行ったクラスが70%以上であった。 新聞を活用したHRを行ったクラスが60%以上であった。 新聞を活用したHRを行ったクラスが50%以上であった。 新聞を活用したHRを行ったクラスが50%未満であった。	A B C D	①総合的な学習の時間や産業社会と人間などの活動で新聞を活用してもらえるよう、職員会議等で依頼をしたところ、62.5%の教員がSHRやHRで新聞を活用した。	C	SHRやHRでは新聞を活用した教員が60%を超えたが、授業での活用は進まなかった。	・教員への新聞記事の情報提供等が必要である。また、職員室に地元の新聞1紙しかなく、情報源の多様化が求められる。
		②各授業において新聞を活用する。 (図書情報)	新聞を活用した授業を行った教員が70%以上であった。 新聞を活用した授業を行った教員が60%以上であった。 新聞を活用した授業を行った教員が50%以上であった。 新聞を活用した授業を行った教員が50%未満であった。	A B C D	②各授業で新聞を活用してもらえるよう、職員会議等で依頼をしたところ、約40%の教員が授業に於いて新聞を活用した。			
③学校図書館の活用を促進する。	①図書館の利用者数を増やす。 (図書情報)	図書館を利用した生徒が20%以上増えた。 図書館を利用した生徒が10%以上増えた。 図書館を利用した生徒が5%以上増えた。 図書館を利用した生徒が増えなかった。	A B C D	①本年度は、年度途中からであるが、「図書館だより」を作成し、蔵書のPRを行った。前年比23%増であった。	A	「図書館だより」による図書のご案内や、校舎が統合され開館日が増えたことにより、昨年度より利用が増えた。	・図書館が生徒の教室がある校舎と別にあり不便であるため、動線の確保が必要である。	



重点課題	重点目標	評価指標と活動計画 目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方針
8 開かれた学校作りの推進	①オープンスクール、公開授業などの教育活動の公開を推進する。	①公開授業を年間3回以上実施する。 (教務・企画総務)	今年度参加者／前年度参加者の割合が150%以上であった。 今年度参加者／前年度参加者の割合が125%以上であった。 今年度参加者／前年度参加者の割合が100%以上であった。 今年度参加者／前年度参加者の割合が100%未満であった。	A B C D	①オープンスクールを含め、公開授業を3回実施した。昨年度よりもPTA総会(73名)や公開授業(6名)、オープンスクールの参加者(497名)が増え、増加率は125%以上であった。	B	評価指標関連についてはおむね達成できた。昨年と比べると学校評価アンケートの回収率も向上しており、(昨年35%本年70.8%)学校の教育活動に対する関心が高まっている。新校舎が落成し、多くの方に学校の教育活動に関心を向けていただいた。 また、学校が津波のための防災避難所となったこともあり、地域の方にも学校に来ていただいた。 公開授業についてはさらに行事に対する案内をして教育活動の内容を理解していただく努力が必要である。	・来年度は公開する学校行事の内容についても検討していきたい。 ・平日の公開授業は参加者が少ない。生徒が中心となる行事と関連させる工夫が必要である。
		②行事案内の出欠の返信回収率を上げ、保護者に学校行事に対する関心を持ってもらう。 (企画総務)	回収率が70%以上であった。 回収率が60%以上であった。 回収率が50%以上であった。 回収率が50%未満であった。	A B C D	②PTA総会、PTA研修会、講演会、の家庭連絡文書の返信回答率を調査した。返信回収率の全体の平均は66.1%であった。			
		③学校祭を保護者や中高生・地域の方に開放する。 (特別活動)	今年度訪問者数が300人以上であった。 今年度訪問者数が200人以上であった。 今年度訪問者数が150人以上であった。 今年度訪問者数が150人未満であった。	A B C D	①学校祭の来場者はPTA89人、中高生及び地域の方々119名の来場者であった。訪問者は200名を超えた。			
	②ウェブサイト等を利用して迅速な情報発信をする。	①本校からのメール配信システムの保護者登録数を増やす。 (図書情報)	保護者の登録数が80%以上であった。 保護者の登録数が70%以上であった。 保護者の登録数が60%以上であった。 保護者の登録数が60%未満であった。	A B C D	①登録状況については生徒数633人に対し、登録数406人となり64%であった。	B	メール配信システムの登録者数は、目標には届かなかったが、昨年に比べ倍近い登録数があった。特に一年生は90%を超える登録数があるなど、登録数は増えた。また、HPについては多数のアクセスがあり、HPのニーズが高いことがうかがえ、内容を充実させたい。	・メール配信システムの登録者数については、案内回数を増やす、担任の先生に協力をお願いするなどの方法で登録者を増やしたい。また、情報発信の回数を増やし、有効に活用したい。また、HPについては内容を整理し、必要な情報が探しやすいHPに成るよう工夫したい。
		②ウェブサイトの内容を適宜更新し、充実を図る。 (図書情報)	ウェブサイトのアクセス数が500件／月以上あった。 ウェブサイトのアクセス数が300件／月以上あった。 ウェブサイトのアクセス数が200件／月以上あった。 ウェブサイトのアクセス数が200件／月未満あった。	A B C D	②1ヶ月平均約10,000のアクセスがあった。			
	③地域・PTA・同窓会等との情報の共有や連携を円滑にするシステムを構築するとともに、地域の人材の活用を推進する。	①PTA活動をホームページを通じて広報する。 (企画総務)	PTA活動の広報を5回以上行った。 PTA情報の広報を3回以上行った。 PTA情報の広報が2回以下であった。 PTA活動の広報が行えなかった。	A B C D	①役員会・PTA総会・PTAの研修会を実施し、PTAの活動については学校のホームページにおいてその広報を実施した。	A	評価指標に関しては達成できた。産業社会と人間では地域の方を講師として迎え、講演していただくとともに、生徒の発表会の審査員としても御出席いただいた。	・学校に地域やPTAの方に訪問していただく機会を来年度も作ってきたい。その内容についても引き続き検討していく。 ・外部講師の方が引き続き学校に来てくれるような生徒の態度、行事の企画が・検討が必要である。
		②「産業社会と人間」では地域との連携を行い、地域の方を講師として迎える。 (企画総務)	外部講師による講演が5回以上あった。 外部講師による講演が3回以上あった。 外部講師による講演が1回以上であった。 外部講師の数が1人未満であった。	A B C D	②外部講師による講演を11回行うとともに、地域の方に来ていただき、地域に学ぶ講座・地域学講座で企業や会社組織・企業経営についてクラス単位での講演をしていただいた。外部講師による講演はのべ17回あった。			

重点課題	重点目標	評価指標と活動計画 目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方針
9 グローバル教育	①郷土の伝統・文化について理解を深める教育を推進する。	①「産業社会と人間」を通して徳島県や鳴門市の歴史・文化・産業の素晴らしさを認識させる。 (総合学科)	郷土の歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が70%以上であった。 郷土の歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が60%以上であった。 郷土の歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が50%以上であった。 郷土の歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が50%未満であった。	A B C D	①②「産業社会と人間」で鳴門に学ぶ地域学講座を2回開催し、地域理解と地域への自身と誇りを深めた。「産業社会と人間」の研究発表では、大半の生徒が鳴門の自然・文化・産業部門の研究を選択、全体発表では全10グループが鳴門に関する発表を行った。インターンシップでは、中小企業家同友会と大麻町商工会に依頼し、地域産業を知るインターンシップを開催し成果を挙げた。3年次の総合学習でも鳴門に学ぶ地域学講座を実施し、郷土に対する知識と理解を深め、進路選択や就職試験にも役立った。	A	「産業社会と人間」では、全生徒が鳴門について学習し、鳴門を語る事ができる知識と視野をもった。その成果は、卒業後の進路に地域創生に必ず生かされる筈である。徳島県唯一の取組みである。	・教職員に地域理解教育の意義を理解させ、次年度に事業を継続させることが必要である。
		②インターンシップや「総学」の時間を通じ、地元根付き、貢献している産業・文化・歴史についての理解を深めさせる。 (総合学科)	地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が70%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が60%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が50%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が50%未満であった。	A B C D				
	②異文化理解学習を通じて共生の精神の涵養を図る。	①授業等の教育活動を通して、海外の習慣や文化に触れ、日本の文化との共通点や相違点についての理解を深めさせる。 (国際交流)	世界には多様な文化があることを理解した生徒が70%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が60%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が50%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が50%未満であった。	A B C D	①②「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」等の講演や授業内容を通して、世界には様々な文化があることを理解した生徒は、「十分理解できた(24.2%)」と「少し理解できた(54.9%)」を合わせた79.1%の生徒が理解できたと回答している。また、それらの授業等を通じて他国や自国の文化を大切にしようと思っした生徒は、「思った(32.9%)」と「少し思っした(47.6%)」を合わせた80.5%であった。	A	異文化理解については、日頃の授業等で一定の理解度が得られたが、海外生徒との交流については、異文化理解の達成度と比較すると、やや低い結果となった。歓迎行事では3年次全員が参加したが、体験授業や交流会等で、少人数の中で深く交流できた生徒は一部であったため満足度がやや低い結果であったと考えられる。	・台湾の成徳高級中学校とは姉妹校締結を結んでいるが、今回の交流では1・2年次生は記念品の作成という形での参加で、実際には交流していない。今後の交流では、部活動等の競技を通して交流したい。また、台湾に姉妹校があることや、その姉妹校と交流を実際に行ったことを知っている保護者は少ないため、HP等で認知度を高めていくことも課題である。
		②授業等の教育活動を通して、異文化を尊重し、自国の文化を誇りに思う姿勢を培う。 (国際交流)	異文化や自国の文化を尊重する姿勢を持つ生徒は70%以上であった。 異文化や自国の文化を尊重する姿勢を持つ生徒は60%以上であった。 異文化や自国の文化を尊重する姿勢を持つ生徒は50%以上であった。 異文化や自国の文化を尊重する姿勢を持つ生徒は50%未満であった。	A B C D				
③スポーツ等を通じた国際交流を推進する。	③海外の学生との交流を通して、新たな世界へ興味・関心を持たせる。 (国際交流)	交流に対する満足度は70%以上であった。 交流に対する満足度は60%以上であった。 交流に対する満足度は50%以上であった。 交流に対する満足度は50%未満であった。	A B C D	③ 4/28に実施した台湾成徳高級中学校との交流については、参加者が3年次生であったため、回答者は3年次生のみである。「十分満足できた(30.1%)」と「少し満足できた(37.2%)」を合わせると67.3%の生徒が交流に満足したと回答した。	B	異文化理解についても講演会の継続実施や姉妹校との交流の活性化を軸とし、さらに新たな活動の可能性を模索していく。	・来年度は、姉妹校締結を結んでいる台湾の成徳高級中学校と国際交流事業があるので、スポーツを通して国際交流に積極的に努める。	
		①競技を通して海外の学生と交流する機会を設ける。 (スポーツ科学科)	競技を通して国際交流に積極的に取り組んだ生徒が70%以上であった。 競技を通して国際交流に積極的に取り組んだ生徒が60%以上であった。 競技を通して国際交流に積極的に取り組んだ生徒が50%以上であった。 競技を通して国際交流に積極的に取り組んだ生徒が50%未満であった。					A B C D

重点課題	重点目標	評価指標と活動計画 目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
10 学校運営体制の充実	①教職員のコンプライアンス意識の高揚を図る。	①学校活動の様々な機会をとらえて、効果的な研修の機会を設ける。	年間を通じて8回以上研修の機会を設けた。 年間を通して6回以上研修の機会を設けた。 年間を通して5回以上研修の機会を設けた。 年間を通して研修の機会が5回未満にとどまった。	A B C D	①外部講師を招いた研修会を7月に実施するとともに、7月と12月にはe-ラーニングによる研修を実施した。また、学期当初や学期末の職員会議の中や職員朝礼時にも実施し、これらを合わせて年間8回以上研修の機会を設けた。	A	教職員のコンプライアンス意識の高揚については、定期的な研修が功を奏し、一定の理解が得られていると考えられる。	・コンプライアンス研修を実施することにより教員の資質をさらに向上させ、生徒の学習指導や生徒指導につなげていく。
		②研修の内容を精選し、受講する教職員の理解度を高める。	全教職員の80%以上が理解度が高まったと考えている。 全教職員の70%以上が理解度が高まったと考えている。 全教職員の60%以上が理解度が高まったと考えている。 理解度が高まったと考える教職員が60%未満にとどまっている。	A B C D	②96.2パーセントの教職員が理解度が深まったと答えており、効果的な研修が行われている。			
	②危機管理態勢の徹底を図る。	①「報告」・「連絡」・「相談」の徹底を図り、全教職員で必要な情報を共有できる体制を整える。	全教職員の80%以上が、職務に関する情報が共有できていると考えている。 全教職員の70%以上が、職務に関する情報を共有できていると考えている。 全教職員の60%以上が、職務に関する情報を共有できていると考えている。 情報を共有できていると考える職員が、全体の60%未満にとどまった。	A B C D	①90.4%の教職員が十分または概ね共有できていると回答しており、情報の共有ができる体制が十分に整えられている	A	危機管理体制の徹底については、基本的な事項についてはおおむね良好に機能していると思われる。	・各課・学年等において、細部にわたる連絡調整については、改善すべき部分もあると思われるので、さらなる改善を行いたい。
		②教職員間の日頃のコミュニケーションを密にするとともに、「風通しの良い職場環境作り」に配慮し、創造的な意見を出しやすい環境を整える。	全教職員の80%以上が、「風通しの良い職場」であると考えている。 全教職員の70%以上が、「風通しの良い職場」であると考えている。 全教職員の60%以上が、「風通しの良い職場」であると考えている。 「風通しの良い職場」であるとする職員が、全体の60%未満にとどまった。	A B C D	②84.7%の教職員が風通しの良い職場であると回答しており、良好な職場環境であると認識されている。			
	③学校価値の創造を推進する新規事業の創出、地域の人材づくり、国際交流等、新しい企画を推進するとともに、課題解決に向けた協働体制を確立する。	①各校務分掌の課長を中心に、本校の教育目標を理解し、その達成に向けた運営を行う。	課長を中心に教育目標の達成を意識した運営ができた。 教育目標を意識した運営ができていたが、一部不十分な点があった。 不十分な点もあるが、一部で教育目標を意識した運営ができていた。 教育目標の達成を意識できていないケースが目立った。	A B C D	①各課の活動について、ボトムアップによる協働体制を意識しながら運営を行うことが出来た。	B	校外での生徒の活動もその場を広げつつある状況で、地域連携、奉仕的、国際交流やスポーツ振興など様々な活動が見られた。 「地域に貢献する人材づくり」については、地域企業の求人に応えることが出来ており、おおむね目標を達成出来たと考える。	・本年度の取り組みを分析し、学校全体の事業計画を作成した上で、それぞれに改善された企画にすることで、新規事業とする。 ・また、地域連携は、地域の解決課題における本校からの企画力・情報発信力の向上が必要と考える。
		②教職員が地域の教育拠点としての学校を意識した協働体制を図る。	協働体制による活動が円滑に実施され、初期の目的を達成した。 おおむね円滑に実施できたが、一部に不十分な点が見られた。 不十分な点多々あったが、効果的な部分もみられた。 協働体制による活動を円滑に実施することができなかった。	A B C D	②-1 国際交流や地域の解決課題に取り組む活動を通じて「地域に貢献する人材づくり」を推進した。 ②-2 取組については、ボトムアップによる協働体制を意識できた。			